

狸親爺、策に溺れる



太田哲夫

「何ですって?」

「だから、今度の日曜日、S中へ、合同練習に行くと言ったんだよ」

此処は、Y市立K中学校職員室、前の発言は、女子バドミントン部キャプテン松葉智子、返答したのは、顧問矢崎英雄、一年八組担任の数学科教師である。

「ヒデさん……、ウウツ」

英雄が、智子の口を右手で押え、

「待てっ、此処ではまずい。そうだな、相談室で話そう。由香も呼んで来い。落ち着いて話そうな、落ち着いて」

と、素早く席を立って、職員室から出て行ってしまった。一学期末テスト前の、部活動中止期間前日の放課後の事であった。

怒り心頭に達した智子は、三年一組の教室へ行って、サブ・キャプテンの沢口由香を呼び出して、

「ヒデが、今度の日曜日に、よりもよってS中へ試合に行くって約束したんだって、今度の日曜日っていったら、区大会の二週間前よ。何考えているのかしらヒデは……」

「智子、私達三年生のバドミントン部員と、ヒデさんだけの時は良いけれど、職員室や下級生の居る所で『ヒデ』なんて呼ぶの止めな」

と言いつつ、由香は「またか」と呆れていた。要するに、此の部活の顧問とキャプテンは、性格が、似すぎているのである。

相談室へ入ると、矢崎が、

「ノックぐらいして入れよな!」

「そんな事より、何で、本大会の二週間前に、あのS中の狸親爺の誘いに乗って、ノコノコ出掛けて行かなくてはならないのかと訊いているんです」

「俺だってな、S中の顧問が、何か企んでいる事ぐらい承知してるよ」

「だったら、どうして受けたんですか?」

「いいか智子、虎穴に入らずんば虎兇を得ずってことわざ知ってるだろう」

「其れぐらい知ってます」

「よく聞けよ。俺は『練習試合だったらお断りしますが、合同練習だったらお受けします』と返事したんだ」

「同じ事でしよう」

「其の違いも分からないで、よくキャプテンやってられるな？」

智子が、思わず立ち上がって、

「何さ、自分だって素人のくせに……」

「何だと！」

たまりかねた由香が、

「二人共、何の話をしてるの？ 智子も、先生が受けちゃった以上、やるしかないでしょう。其れから、先生も、そういう大事な事は、即答しないで、私達の意見も訊いてからにして下さい」

智子が小声で、

「フンツ、本当は、S中の白井って娘に会いたいんでしよう」

「違う！ 白井の腕が、どの程度上がっているか、知りたいだけだ」

「そうね。白井さんは、色白で、先生の好みのタイプですものね」

「二人共、いいかげんにして！ 私、帰るわよ。そんな話だったら？」

「そうだ智子、由香の言う通りだ。冷静に話し合おう。良いな」

「ウン、分かった。そうしよう」

「俺の考えではな、S中の上原先生は、一月の個人戦だけの新人戦で、智子に目を付けた。其処で、自分の方の白井が、此の半年で、かなり強くなったので、智子と当てて、あわよくば、区大会前に潰してしまおうと考えた」

「潰すですって、いい度胸してるじゃないの、こっちこそ、白井なんて、簡単に捻ってやるわよ」

「だから、あの狸親爺は、智子の其の直ぐにカツとなる性格を見抜いた上で、練習試合を申し込んで来た訳だ。つまり、本番形式の（昭和五十年当時の中学生の団体戦）、ダブルス、第一シングルス、第二シングルスの団体戦での試合を申し込んで来た。すると、当然、第一シングルスで智子と白井が当たる事になる。そして、其のエース対決で勝った方が、本番での自信を持つ、すると、万年一位で市大会進出の常連校のI中は別格だから、残りの市大会への切符は一枚だ。其れを今年は、選手層の厚くなったウチとS中が争う事になる。

其処で俺は、合同練習にと、逆提案した。其れならば、S中に乗り込んでから、顧問同士の話し合いで、どんなカードでも組める」

「でも、向こうが、私と白井の試合を申し込んで来たらどうするの？」

「当然、受けて立つ。智子だって、逃げたと思われたく無いだろう」

「当たり前じゃん。でも、其れじゃあ、私と白井が試合する事にならないじゃない」

「そうさ。けれども俺には、あの狸親爺の企みを、逆手に取る名案がある。其れを話すから、三人で一緒に検討しよう」

其の日の放課後、三人が相談室を出たのは、約一時間後であった。

そして、当日の日曜日の午前九時過ぎ、既にユニフォームに着替え、S中体育館内で、アップの素振りしながら智子は、前日、矢崎から伝えられた、顧問同士による打ち合わせの内容を、頭の中で再確認していた。

・時間は、午前九時～午後一時

・両校は、三十分のアップの時間を取り、合同練習の開始時間は、九時半とする

・対戦カードは、両校の顧問が、選手の様子を見ながら決める

・選手側で、カードに異議のある場合は、キャプテンを通じて申し出る

まあ、考えてみれば、自分がヒデさんの立場でも、S中顧問の策略と分かっている、受けたであろうと、今では納得していた。

生徒達が、アップをしている最中、両校の顧問は、職員室で、茶を飲みながら、「上原先生、お誘いを受けて、ノコノコやってきましたが、今日のところは一つ、お手柔らかにお願いします」

「いやいや、矢崎先生もお若いのに、なかなか懐が深いですな。其れで、今日は、どのようなメンバーでいらっしゃいました？」

「大会にエントリーしている三年生十一人と、雑用係に二年生四人連れてまいりました」

「其れは良い。お宅が、最強メンバーでいらしたとあれば、此方の手札も全てオープン致しますので宜しく」

後は、雑談に終始し、五分前に体育館入りし、上原の、

「集合！」

の一声に、両校共、其々の顧問に向かい合う隊形で、キャプテンを先頭に、後は二列縦隊に整列した。

智子が、チラッと横に目をやると、やはり、S中キャプテンは白井で、鋭い目で睨み返して来た。

「其れでは、両校選手は対面する隊形となり、S中キャプテン、号令」

向かい合った両校、白井の号令、

「気を付け！ 礼！」

「宜しく願います」

「其れでは正面を向いて、休め！ K中の皆さん、今日はよくいらっしやいました。お互いに、区大会に備えての、肩慣らしのつもりで練習しましょう。矢崎先生も、何か一言」

「S中諸君の胸を借りるつもりで参りました。お互いにとって、有意義な練習となる事を期待しています。宜しく」

「コートは、ステージ側から、A、B、Cコートとします。キャプテンを残して、他の選手は、コートを使つての練習に入つて結構です。では、解散」

自然に、S中はAコート側、K中はCコート側に別れて、コートやコートサイドでの、シャトルを使った練習を始めた。

残された智子は、上原の指示で、白井と握手し、基本的にA、Bコートでシングルス、Cコートでダブルスの試合を、十一點三セットマッチで行なう事を伝えられた。とりあえず、シングルスの四試合、ダブルス二試合の対戦カードを、両顧問から提案され、智子も白井も、異議なしとの事で、最初の六試合のカードが決まった。

K中側は、先日相談室での話し合いの通り、シングルスは、団体戦にエントリーしている木村、個人戦の村田、内田、団体戦の川井の順、ダブルスは、団体戦の加藤・大沢組、個人戦の森山・安藤組で、K中側の様子を見る作戦に出た。

一方、S中側は、シングルスは、第一試合から、エース白井、新人戦でも良い動きをしていた四谷、残りの二人は、新人戦でも見掛けなかった選手を出して来た。

「主審、線審共、此方でお引き受けしますよ」

「では、連れて来た二年生四人、其方にお預けしますので、適当に使つて下さい」との事で、英雄が、四人を呼び寄せ、上原に紹介して、S中側の手伝いを命じた。

「其れでは、各コート共、試合開始！」

との、上原の一声で、一斉に試合が始まった。

ダブルスの試合を、由香に見てもらい、智子は英雄と一緒に、白井対木村の試合を見に、Aコートへ移動した。ハッキリしている事は、S中は、現在試合を行なっている四人が、レギュラーのトップで、始めから、完全に勝負に出て来ている

という事だ。

英雄が、

「白井は、半年見ないうちに、随分……。イテエ、何すんだよ」

智子が、シューズの上から、左足の甲を踏んだのだ。

「白井が、大人びたとか、美人になったとか言おうとしたんでしょ」

「何で、分かる？」

「悔しいけど、私も、そう思ったもん」

「オイオイ、そんな事言ってる場合じゃねえぞ。亮子（木村）が完全に、オモチャにされてる。智子、お前、亮子の側のエンドラインを横から見に行つて、白井のハイクリアーが、どの辺に落ちているか見て来い。俺は、白井のサイドで、フットワークと、技の種類を確認しているから、見極めたら、直ぐに戻つて来い」

「分かった。行つて来る」

亮子は、小柄だが、フットワークの速さを生かして拾いまくり、隙を狙つて、多彩な技で勝負する選手で、英雄が、団体戦のシングルの三番手として、選手登録していた。

「先生、信じられない。亮子が打ち返していなかったら、殆どライン上に落ちていくね。其れで、ヒデさんの見たところではどうなの？」

「フットワークのスピードは、お前と同じくらいだけど、手足が長い分、コート全体を動き回れる。技は、亮子相手では、本気出すつもりはなさそうだから、正直、分からない。此れ以上見ても参考にならないから、Bコートへ行こう」

Bコートも、久子（村田）が苦戦を強いられていた。相手の四谷は、白井に比べてK中の亮子と同じタイプであったが、亮子と異なるのは、一本一本の技の力が強く、何にも増して、気迫が凄い。白の短パンに、白のハチマキをして、K中の中でも、シングルスでは、ベストエイトにはいる久子も、タジタジという感じであった。

「智子、四谷が相手だったらどうだ？」

「亮子と同じタイプね。此の気迫は、たぶん、白井を倒そうという気持ちだが、ずっとあったんだろうね。でも、私はいつも、気力では誰にも負けないつもりでプレーしているから、何とかなると思うわ」

「たぶん、本番では、此の四谷が、第二シングルで出て来るだろうな。ヨシッ、今日のシングルの四試合目を、明美（川井）からお前に変更しよう。いいか、相手

が誰であろうと、全力を出せ！ 白井みたいに、猫が鼠をいたぶる様な試合はするなよ。

俺は、今から狸親爺に申し入れに行つて、ついでに、今日の試合の最後に、お前と白井のシングルの試合を組んでもらう様に頼んで来る。いいな」

「分かった。明美には、私から言っておく」

直ぐに英雄は、上原が試合を観戦している所へ行き、

「上原先生、ちょっとお願いがあるのですが」

と、生徒から離れた場所へ出て来てもらい、

「二点あります。一つは、シングルの四試合目を、川井から松葉に変更する事、もう一つは、シングルの最終戦に、キャプテン同士の試合を組んでいただきたいのですが？」

「そうですね。結構ですよ、何しろ此方が、わざわざお呼びだてしたのですから、試合の組み合わせは、其方にお任せしますよ。矢崎先生の考えた通りになされば宜しい」

「ありがとうございます。お言葉に甘えて、そうさせていただきます。失礼！」

矢崎は、Cコートでダブルスを見ている由香と合流し、智子も呼び寄せ、

「試合の組み合わせは、こっちに任せるとき。明美は、オーケーした？」

「うん、全然問題なし、ケロッとして、

『アッ、そう。分かった』

って、あの娘も変人ね」

「他人の事言えるか？ 今の三年で、唯一まともなのは、由香だけだ」

「ありがとうございます。でも、其れに輪を掛けた変人の先生に褒められても……」

「其れはともかく、向こうのダブルスはどうだ？」

「もし、あのペアが、S中の一番手だとしたら、絶対に勝てます。新人戦用に、半年前に組んだ真理（加藤）達のペアと互角の勝負をしていますから、私と恭子（小林）は、去年の二学期から組んでいますので、コンビネーションが全然違います」

「智子、お前の最初の試合相手が誰であろうと、完璧に叩き潰せよ。其れから、最後の白井との試合は、勝負にこだわらず、お前の持っている全ての技を出して、白井の弱点を捜せ、本番で勝てば良いんだからな」

「オーケー、ヒデさん」

そして、Bコートで四谷が、セットカウント二対〇で久子を振り切り、同時にAコートでも、白井が、完全に試合をコントロールして、拾いまくる亮子のスタミナを、じわじわ奪って、此方も、セットカウント二対〇で下した。

続いて、Aコートでは、K中では正子(内田)と、S中でも、白井、四谷より、一ランクも二ランクも実力の低い選手であったが、正子が、K中で十番目ぐらいの選手であったので、第一セットこそ競り合ったが、第二セットは、大差でS中の選手が勝利した。Bコートの智子は、完全に相手を飲んでかかり、速攻で、相手に殆ど技を出す間を与えずに、二セットともラブゲームで完勝した。

Cコートのダブルスは、真理・恵(大沢)組がフルセットまで粘ったが惜敗、二試合目は、清美(森山)・直子(安藤)組が、第一セットを落としたものの、第二セットから逆襲に転じ、第二、第三セットを連取し、一勝一敗の五分五分となったところで、K中は満を持して、由香組が登場した。K中で一番冷静な由香が、パートナーの長身、恭子に適確な指示を出し、セットカウント二対〇で勝利した。

両校顧問も、此の辺で、おおよその相手の戦力を掴んだと判断し、後の試合は、選手を入れ替えながら試合を組み、残り三〇分で、一度全ての試合を止め、Bコートで、智子对白井のシングルのエース対決を開始、両校の部員全員に見学を命じた。

智子はコート入りして直ぐに、英雄と、アイコンタクトで、先程の指示を確認した。要は、本番で勝てば良いのだと割り切っていたつもりだった。

両校の部員は、コートサイドから二メートル以上離れて観戦する事、ただし、顧問の他に、部員一人だけは、立って二メートル以内に入らない事を条件に、コート周囲の何処に居ても構わないという申し合わせが、顧問同士の間で交わされていた。S中の上原が四谷を従えて、コートを挟んだ、主審と反対側のネット近くに並んで立ったのに対し、K中は、英雄が、智子側のコートのエンドラインの後ろに立ち、由香を白井側のエンドラインの後ろに立たせた。

トスで先攻となった智子が、サーブで、高く深いシャトルを上げると、白井は、すかさず長い足を生かしたフットワークで後退し、負けずに、ハイクリアーで返して来た。すると智子は、再びクリアーを打つ構えから、得意のドロップショットを、ネットぎりぎりに落とす。

「とにかく、先に技を出せ！」

との、英雄の指示通りの作戦である。しかし、其のドロップを拾いに前進して来る白井の速さは、今まで智子が対戦した誰よりも速かった。

「ヘアピンで勝負してくる！」

と直感した智子が、フットワークを生かして、前へ走った。ところが、余裕でネット際のシャトルを拾った白井は、高々とクリアーを上げて来た。シャトルは、智子をあざ笑うかの様に、ラケットの届かない頭上を越えて、エンドライン上に、ピタリと落ちた。

シャトルを拾いに行った時、後ろに立っていた英雄の口が「ドライブ」と動いた。

白井は、いきなりショートサーブスを入れて来た。智子は、其れを白井のバックハンド側に速いシャトルで返し、白井もとっさの判断で、強く叩き返して来た。其処からは、両者共、コート中央に立っての、ドライブの応酬となったが、此処は、智子の気迫が上回り、根負けした白井が、甘いシャトルを返して来たところを、智子が、強烈なスマッシュで決めた。試合が動き出し、互いにコート全体を縦横に走り回って、様々な技を繰り出したが、どちらかと言えば、智子が押され気味であった。其れは、得点にも表れ、常に白井がリードし、智子が追う展開となり、第一セットは、十一対八で、白井がものにした。

コートチェンジの際、英雄は、

「どうも白井は、まだ、全力を出し切っていない様な気がする。智子、次のセットは、負けても良いから、カットを落としてみる」

「でも、あの技は、覚えたばかりで、使いこなせるまでにはなっていないですよ」「ネットを越えなくてもいい。とにかく、智子が、カットを使う事を白井が知れば、白井も必ずカットを落として来る。其の成功する確率は、俺と由香でチェックするから、お前は、第一セットの後半の時と同じ様に動き回れば良い。使える技を全部使つてな。ヨシッ、行け！」

第二セット、サイドチェンジ、サーブスも、第一セットと逆の白井からとなった。

エンドラインぎりぎりに落ちて来る、白井の高いシャトルに難なく追い付いた智子は、ラケットの面の角度を微妙に変えて、思い切ってカットショットを放った。シャトルに回転が加わり、斜めにネット際に落ちて行った。入れっ」と、心の中で叫んだ時、シャトルは、ネットを僅かに越えて、白井側のコートに落ちた。

まさか、智子がカットを落としてくると思わなかったのだろう。さすがの白井のフットワークをもってしても、ネット際を斜めに落ちて来るシャトルに追い付けなかった。

そして、サーブ権を待たず智子が、サーブを放つ構えをした時、白井の顔が、真っ赤に染まって見えた。第一セットでは、余裕を持って戦っていた白井が、智子がカットまで使える事を知って、初めて本性を表情に現したのだ。

よし、後はヒデサンの言う通り、負けても良いから、徹底的に走り回って、持てる技を全て出して戦えば良いのだ。

智子は、焦らす様にゆっくりと、高く深いサーブを上げた。当然、白井も余裕でステップバックした。今の白井なら、きつとカットを落として来ると確信していた智子は、直ぐに左方向のネット際に向って走り出した時、信じられない事に、白井が、ラケットの裏側の面を使ってカットを落として来たのだ。つまり、シャトルは、智子のカットとは逆回転をしながら、ネットの右側に落ちつつあった。慌てて智子が、ステップの向きを変えて、ラケットを伸ばしたが、手遅れであった。

「チクショーツ！」

智子は、完全に頭に血が上った。両校の部員の見ている前でのエース対決で、本気を出した相手校エース白井に、馬鹿にされたのだ。其れなら、前のセットで打ち勝った、ドライブで勝負してやる。と、其の時、智子のコートの後で、バタンツツと、人の倒れる音がした。振り向くと、コートチェンジした後も、第一セットと同じ場所立っていた由香が倒れていた。

直ぐに上原の声で、

「主審、試合を中断しろ！」

と言って、由香の倒れている場所へ走った。当然、白井側のコートの後に居た英雄も、コートサイドを走って駆け付けて、

「オイッ、由香、しつかりしろ！」

と、右の頬を叩いた。

周囲に生徒が集まって来るのを、上原が制止する為に、由香から目を離れた瞬間、由香が英雄に向って、ウインクしてみせた。

「オッ、気が付いたな。大丈夫か？ 何、貧血で起き上がれないだと、オイッ、K中の二年四人で、由香を体育館の外の日陰へ連れて行って様子を見ている。多分、

熱中症だろう」

上原が心配して、

「大丈夫ですか？ あの生徒さん」

「間題ありません。熱中症です。此の暑さですからね。ただ、彼女、サブ・キャプテンなので、うちの松葉が動揺している様ですので、三分ばかり時間を下さい」

「分かりました。主審、三分間の試合中断。三分経ったら合図しろ。彼女は大丈夫な様だから、両校共、他の生徒は、其のままの態勢で居なさい」

此の間に、智子が英雄に近付いて来て、

「由香、大丈夫ですか？」

英雄が、素早く周囲を見回し、小声で、

「大丈夫に決まっているだろう。サブ・キャプテンが、此の程度の暑さで倒れる訳ないだろう。あれは芝居だ。いいか智子、黙って聞けよ。お前、今、頭に来て、俺の指示を忘れかけただろう。いいか、もう一度言うぞ、全ての技を使って走り回る、お前のバドミントンをやれ！ 分かったな」

「うん、分かった。そういう事ね」

「ヨシッ、行け！」

英雄が、由香の代わりにを考えていると、背後から「ボンボン」と、肩を叩かれた。振り返ると「野性児」明美が、

「ヒデさん、此処は私に任せて。ヒデさんは、白井の動きを、サイドから見たら？」

明美は、基礎こそしっかりしているが、コートに入ると、本能のままに動くシンドルスの選手で、実力はあるのだが、確実性に欠け、大きな場面での起用に迷う存在であった。

コートでの試合は、本来の気迫を表に出して来た白井と、エンジン全開の智子との目まぐるしい攻防であったが、明美の言う通り、横から見ていると、ストライドの長い分、同じぐらいの速さで走り回る智子より、白井の方が一枚上であった。

結局、常に白井が先行し、智子が其れを追う、第一セットと同じ展開となり、第二セットも僅差で白井が取り、セットカウント二対〇で白井の勝ちとなった。

此の試合が終了すると同時に、K中部員は、荷物置場にラケットを置きに戻り、智子を先頭に、体育館内に戻って来ていた由香も含めた全員が、S中顧問上原の居る所まで走り、横一列に整列し、智子の、

「気を付け！ 礼！」

の号令で、全員が、

「ありがとうございました！」

と挨拶をし、再び走って戻り、素早く着替え始めた。英雄は、余裕の表情で、其の様子を見ている上原に歩み寄り、右手を差し出し、

「今日は、良い勉強をさせていただきました。二週間後に、また、お会いしましょう」

「お宅のキャプテンには、少々、冷汗をかかされましたよ。今日は、ご苦労様でした」

握手を交わし、体育館の出口で制服に着替え終って整列している生徒の横に立ち、再び智子の号令で挨拶をし、S中を後にした。

校門を出ると、さすがの智子もしょげた様子で、英雄の横を歩いていると、いきなり後ろから明美が、

「ヒデさん。私、今日、試合してないよ」

「エッ！」

英雄と智子が、同時に叫んだ。

「何で、今頃になって言うんだ！」

「いいじゃん、本番で頑張ればいいいでしょ。其れでね、私は、白井みたいに澄ました奴は大嫌い。ムカつくのよね。どうせ、本番も智子とやる事になるんでしょけど、ああいう奴は、感情的にさせれば、自滅するよ、きつと」

英雄も、なるほど思ったが、智子と由香にも、其れなりに自分で考えさせる必要があると思ったので、

「其の手もあるな。とにかく、智子も由香も試合前日まで考えておけ。明美、ありがとうよ。案外、お前の勘が当たっているかもな？」

且区大会当日、会場はI中、大会運営は、大会会長でもあるI中顧問が、自校の生徒を使って全て行なうので、他校は、必要最小限の人数で来る事との意向が伝えられていた。

開会前の体育館内では、各校の選手が、ウォーミングアップに余念がなかった。

K中顧問英雄、キャプテン智子、サブ・キャプテン由香の三人が、試合前日に考えて持ち寄った作戦は、偶然にも一致していた。

「よし、此れで行こう！」

の英雄の一言で決定、今日の大会に臨んだ。

会場入りして、着替えもそこそこに、英雄、智子、由香の三人で、壁に大きく貼り出してある、リーグ戦総当たりの対戦表を見に行った。

K中は、午前中、対S中、M中、O中、E中戦の順に試合が生まれ、午後は、対N中、最終戦がI中戦であった。前日の三人の申し合わせでは、I中戦、S中戦の二試合は、K中最強メンバーで戦うと決めてあった。つまり、エース智子を第一シングルに、前のダブルスは、K中一番手の由香・恭子組、第二シングルに明美が控える陣容である。

此のメンバーの根拠は、対S中戦を考えた場合、由香のダブルスは、S中どのダブルスが出て来ても勝てるという自信によるものであった。智子が白井に敗れても、本能のままに戦う『野性児』明美が、たぶん、S中の第二シングルに出場して来るであろう四谷に勝つ事に賭ける作戦であった。

八時半、開会式、散会して、八時五十五分、ステージ上の本部から、マイクでのコール、「試合開始五分前、各校キャプテンは、第一試合に決められているコートで、主審の立ち会いの下、メンバー票の交換をして下さい」

K中对S中戦の行なわれる第三コートで、智子と白井がメンバー票を交換した。智子が顔色を変えて、コートサイドの英雄達の所にメンバー票を持って来た。其れを見て、常に冷静な由香も動揺した。何と、S中は、白井をダブルスに起用して来たのだ。時間が無い。直ぐに英雄は、由香・恭子ペアに対し、アドバイスをした。

「第一に、由香が前、恭子が後の攻めの陣型を崩すな。第二に、恭子は白井の大きなクリアーを長身を生かして、同じぐらいのハイクリアーで返す。第三に、由香は前で拾いまくって、チャンスがあったらドライブ勝負に持ち込め。最後に、一番大切な事だが、パートナーを無視して、徹底的に白井にシャトルを集める。分かったな」二人共、緊張した顔で頷いた。

本部席で、ホイッスルが鳴り、各コート、顧問と出場選手四人が、ネットを挟んで向かい合った。主審の、

「此れより、S中对K中の試合を始めます。互いに礼！」

顔を上げて、S中の狸親爺の顔を見た時、相手が『ニヤッ』と笑った様に見えた。ダブルスの選手を残して、トスで決めた自分達のチームのコートサイドに出た。主審が、白井にシャトルを渡し、軽くクリアーを打ちあわせた後、

「ラブオール・プレイ」

と、試合開始をコールした。

白井が、早速、ロングサーブスを上げて来たが、シングルスと違い、エンドラインが短いので、長身の恭子が負けずに、白井に向けて、更に高いハイクリアーで返した。

英雄は、智子と明美と三人で額を寄せて、

「やっぱり、仕掛けて来やがったな。お前達、白井をダブルスに起用して来たのは、何故だと思う。まず、智子？」

「白井を出すまでもなく、私が相手だったら、シングルスは四谷で充分だと思ったんでしょ。チクショー、馬鹿にしやがって」

「明美は、どう思う？」

「後の試合に備えて、白井をダブルスに出して、スタミナの消耗を減らす。四谷が負けて

も、私は、二週間前に試合をしていないし、他の選手もたいした奴じゃ無いと考えた」

「で、結果は？」

「由香は、絶対に動揺しないから、ヒデさんの言った通り、徹底的に白井を狙い打ちにすれば、白井が自滅して、ダブルスは勝てる。そしたら、智子は、コートを広く使って、四谷を走り回らせれば、其れで終りよ。だって、四谷はうちの亮子と同じタイプで、少し強いぐらいなもんでしょ。だったら、智子が、冷静に普段通りの試合をすれば勝てる」

「俺も、そう思うな。キャプテンは？」

「チクショー、白井に馬鹿にされた！」

「まだ、そんな事言っただけやがる。明美、智子を洗面所へ連れて行って、頭から、水ぶっかけて来い！」

「まあ、先生も落ち着いて、ホラッ、まだ第一セットの半分も進んでないのに、白井の顔色が変わってるよ。由香が拾い捲りながら、完璧に恭子をコントロールしているから、絶対に大丈夫、此れで白井が痺れを切らして、ドライブ勝負に出て来ればこっちのものよ」

白井は、イラついていた。ダブルスでは、力の劣る選手を狙うのがセオリーなのに、此の相手は、完全にシングルのエースの自分に狙いを集中して来る。

パートナーも、頭に来ている。幾ら白井がエースと言っても、ダブルスではコン

ビネーションが大切だ。自分は、S中ダブルスの一番手の一人だ。

そんな気持ちを見透かしたかの様に、横並びの陣型をとっていた二人の中間に、由香がハイスピードのドライブを叩きこんで来た。左サイドに居たパートナーは、当然自分のシャトルと思い、ラケットを出したところ、なんと、白井もバックハンドでラケットを振って来たのだ。

「ガッシャーン」

ラケットが交錯して、両者共、ラケットを落とした。

「何やってんのよ！ 私に任せればいいのよ」

「キャプテンだからって、威張らないですよ。ダブルスには、ダブルスのやり方があるのよ。あんたの得意のハイクリアーだって、殆どラインアウトしてるじゃないの」
コートの中中で、味方同士の口喧嘩が始まった。直ぐに主審が、

「S中チームに警告します。直ぐに、試合を再開して下さい。一分以内に再開しない場合は、遅延行為とみなし、S中チームの失格負けとします。六十、五十九、……」

完全に分裂したS中ダブルスは、K中ダブルスにとっては思う壺で、ここぞとばかりに、ドライブ、スマッシュを、冷静にコースを狙って叩き込む由香の敵では無かった。

そして、其れを目にした智子が、気分一新、ラケットの素振りを始めた効果が大きい。

「明美？ うちのエースにスイッチが入ったみたいだけど、早すぎねえか？」

「大丈夫、智子が、ああなったら、誰にも止められないわよ。ひよっとして、I中のシングルが舐めて掛かって来たたらチャンスよ。ダブルスが負けても、智子が勝ったら、後は、私が一世一代の大暴れを見せてあげるわ」

「オッ、第一セットが終わった。コートチェンジの間に、由香に一言、声かけて来る」
第一セットを取った由香・恭子組に、

「いいか、第二セットは、向こうも白井が後、パートナーが前の陣型にチェンジして勝負を掛けて来るぞ。恭子は、まず、白井のハイクリアーをよく見極めろ。シングル一本でやって来た奴は、ダブルスのエンドラインの感覚が判らないから、オーバーする可能性が高いから、よく見て、インだったら、また、白井狙いで大きいのを返せ」

「ハイッ！」

「由香は、ネット際に落として来る、白井のドロップとカットを打ち返す事に専念しろ。お前なら、白井のラケットの微妙な角度で、ドロップ、カット、逆カットのいずれかが判るだろう」

「其れは、もう完全に見切れます」

「そして、シャトルを掬い上げる時に、ヘアピンを使わず、後の白井を狙って上げろ！」

「分かりました」

二分間のインターバルの最中、S中側では白井が、上原に、何かさかんにまくしたてていたが、既に、自分の奇策が失敗であった事が判っている狸親爺は、とにかく、白井をなだめるのに必死であった。

主審のコールで、第二セットが始まった。由香が、いきなり、白井の顔面めがけてショットサービスを放った。白井は、かろうじて、ラケットで其のシャトルを払い除けたが、ネットを越えたシャトルは、ダブルスのサイドラインの外へ落ちた。

一方、S中第二シングルの四谷は、急遽ウォーミングアップを始めたが、まさか白井が、ダブルスとは言え負けるとは思ってもいなかったもので、内心の動揺は大きかった。四谷は今まで、同等か其れ以上の実力の学校相手では、練習試合を含めて、相手エースと戦う、第一シングルで試合をした事は一度も無かった。

第二セットも由香組は、白井狙いを徹底して来て、完全にS中キャプテン白井の頭の配線をズタズタにした。ハイクリアーを上げればラインアウト。ドロップ、カットは、冷静な由香に読み切られ、再び後方高く打ち上げられ、為すすべも無く、セツトカウント〇対二で完敗した。

次の第一シングルの智子対四谷は、もっと惨めであった。気力の充実した智子が、多彩な技を繰り出すのに対し、本来気迫で戦う四谷が、自分が負けたら終りだと言うプレッシャーに押し潰され、シャトルを追い回しているうちに、気が付いたら、智子に二セット連取されていた。

主審のコールで、試合前と同じ様に、ネットを挟んで整列、

「K中対S中戦は、ゲームカウント二対〇でK中の勝ちとなりました。互いに礼！」
礼をした後、ネット下で英雄と手を握り合った上原は、

「君に策を弄した私の負けだ。今日は、行ける所まで行きなさい。うちが援護します」

「ありがとうございます。頑張ります」

と言葉を交わして別れると、他の二つのコートは試合中であつたので、英雄は、七人を体育館の片隅に集め、まず智子に、

「さすがキャプテン、楽勝だつたな。其の調子で一気に行け、最後のI中戦までは、第一セットの前半で、全ての技を出して、相手の弱点を見付けたら、徹底的に其処を攻めて、二対〇で取って来い。お前のスタミナは、人並み外れているから、残りの六試合も頼むぞ」

「任せてヒデさん。今日は絶好調だからね」

「よし、お前は、自分の事だけ考えている。今日一日の作戦は、由香と明美と俺の三人で考えるから、心配するな」

「オーケー」

「亮子、真理、恵の三人は、自分達が何時も戦っているパターンで勝負しろ。次のM中戦は、智子以外は、お前達を出す」

「分かりました」

「其れと、恭子、もう一度確認するが、由香の指示に付いて行けるな？」

「ハイッ、大丈夫です」

「よし、由香と明美以外は、次のM中戦のコールがある迄、自由にしていてよし」

そして、残りの三人で暫く、第三試合のO中戦以降のオーダーを相談し、作戦を練つた。

「俺は、I中の選手を見に行く、もちろん、うちの学校の試合のコールがあつたら、其のコートへ直行する。由香は、智子達のメンタル面をうまくコントロールしろ。最後に、明美がI中戦との鍵を握る可能性があるが、お前の運動神経と筋力は、うちで一番だ。相手が、お前がセオリー無視の試合をする選手だと気が付く前に、第一セットを取ってしまえば、うちにも勝機がある。以上だ」

と言ひ残して、英雄は、ちょうど第一試合のM中を退け、控え場所に引き上げて待機しているI中の控え場所を、少し離れた場所から見ていた。顧問は学生時代にバドミントンの選手であつたらしい。英雄はずぶの素人だつた。しかし、S中の白井を見るまでも無く、選手は、中学生で、感情に左右され易い思春期の女子だ。今日はI中に一泡吹かしてやれそうな予感がした。

「唯今より、M中対K中戦を第一コートで、I中対E中戦を第二コートで開始しま

す。出場校の選手と顧問は、移動して下さい」の放送が流れた。

対M中戦の試合が始まると、後を由香に任せ、英雄は、隣のコートで試合をしているI中選手に注目していた。格下のE中相手なので、ダブルスも第一シングルも、セットカウント二対〇で下す完勝であったが、市大会に照準を合わせているせいなのか、今一つ選手のモチベーションが低い様であった。

一方K中は、二番手ダブルスの真理・恵組が苦戦した様だが、何とかフルセットの末勝利し、本人の言う様に、絶好調の智子、二セット共、ラブレームで取り、二勝目をあげた。

三つのコートで試合が行なわれていた為、S中一チームが試合の無い時間帯となった。

上原は、選手七人を連れて、一度体育館から出て行った。暫くして戻って来たS中選手の顔は、白井を先頭に、口を真一文字に結んだ厳しい表情に変わっていた。

さすがに、ベテランの上原である。短時間で選手達を、完璧に立ち直らせた。

そして、午前中の四試合ずつを終了した時点でK中は、主に由香のインサイドワークで、智子の調子をうまくリードしながら、一方で、相手校によって、ダブルスと第二シングルの選手を替え四戦全勝で、I中と並び、二戦目以降立ち直ったS中が三勝一敗で続き、他の四校の星の潰し合いもあり、市大会への出場権争いは、此の三校に絞られた。

I中は、午後の一試合目にS中、最終戦がK中との上位二校との連戦となる。

午前中の試合進行が速かった為、昼食時間はゆっくり取れた。昼食後休息をしているK中の控え場所に、二戦目から、本来の第一シングルで調子を上げて来た白井がやって来て、

「沢口さん、話があるのだけれど、ちょっと来てもらえる」

と呼び出しに来た。由香が、英雄に、目で合図を送って来たので、オーケーした。二人は、少し離れた場所で密談していたが、十分程で終わった。

由香が報告に来ようとしたが、英雄も大体の話の内容が分かっているつもりだったので、手で制した。多分、午後のI中戦に関する情報でも交換していたのであろう。

午後の第一戦の、対N中戦では、由香組のダブルスが正攻法で、調子の波に乗り続けている智子が、共に相手に隙を与えず、セットカウント二対〇で連取し快勝し

た。

其の時、第三コートの方から歓声が上がった。ダブルスを落としたS中が、白井の奮闘で、第一シングルの第一セットを、I中のエースと思われる相手から先取したのだ。I中は、これが今日初めての失セットであった。

S中に加え、K中の選手の見守る中、第二セットは、白井の得意とする、ハイクリアー攻撃で粘り、相手のミスを誘って甘いシャトルが来たところを、スマッシュで叩き込む戦法で先行したが、相手もI中のエースである。白井と同じ戦法で、点差を離されない様に追って来る。また、ドロップを落とすタイミングの読みあいも互角。九対八と追い継られた時、出た！白井の正確なカットが、ネットすれすれに斜めに落ち、さすがのI中エースも拾いきれなかった。

マッチポイント、白井の高いサーブスを落ち着いてハイクリアーで返し、今度は慎重にネット際の中央から左を意識しながら前進して来たところに、白井の隠し技、逆カットを落とされたのでは堪らない。シャトルが、ネットの右寄りに落ちて来て、ジ・エンド。

I中の第二シングルは、第一シングルが一セット目を落としたところで、慌ててアップを始めていたが、S中四谷は、ダブルスが終了した後、一度姿を消し、何処で着替えたのか、短パンに白いハチマキ姿で、既にアップを終えて、コートサイドに控えていた。

I中は、此のS中との試合で、市大会進出を決めたかった様で、第二シングルに、第一シングルと同等の実力の選手をエントリーしていた。得体の知れないK中との最終戦に持ち込むのに不安を感じていたらしい。

だが、此れが三年間で最後の試合になるとの覚悟を決めてコート入りして来た四谷の気迫に押され、コート内を全力で走って拾い捲くる戦法に根負けし、返しが甘くなったところに、スマッシュを叩き込まれた。今日に向けてのコンディション調整の失敗と暑さの為にスタミナ切れで、第一セットの後半に、痙攣をおこして倒れた時点で、I中顧問が主審に棄権を告げた。

そして、最終戦の、無敗のK中と一敗のI中の対決の時がやって来た。I中は、S中戦で組んだメンバーから、ダブルスと第二シングルの選手を代えて来た。K中は、前日からの打ち合わせ通り、第一試合の対S中戦と同じ、ベストメンバーで臨んだ。英雄は、

「ダブルスは、負けても良いから、S中戦の時の気迫と戦法だけは忘れるな。

智子、相手の第一シングルは、白井に負けて動揺している筈だ。今のお前なら勝てる。

明美、最後は、お前の暴れっぷりに賭けた。勝敗の事は考えなくてよし、自分の運動神経と筋力を信じて戦え！」

「ハイッ」

「任せて、ヒデさん」

「ヨシッ、一か八かやってみるか」

第一コートで始まったダブルスの試合は、由香の動きに、今日四試合目の恭子の足が付いて行けず。必死の追撃も、二セット共僅差で及ばなかった。

そして、注目のエース対決、K中は、五戦五勝と波に乗る智子、I中は、前の試合で白井に不覚を取った選手である。

白井戦でのショックが癒えないうちに、思ったよりも早くダブルスが終わってしまった。後に、自分と同じぐらいの実力の選手が控えて居ると言っても、エースとして、二戦続けて負ける訳には行かない。気は焦るが、相手の智子が、此の暑さの中、六試合目だと言うのに、全くスピード、技の切れが衰えていない。

大会前、区内最強との前評判の高かった自分が、絶対に負ける筈がないと言う気持ちだが、逆にプレッシャーとなり、第一セットの中盤で、智子にリードを許した時に、遂に気持ちが切れてしまい、二セット共ダブルスコアの屈辱的な敗戦を喫した。

そして、勝負は第二シングルの勝敗に掛かっていた。試合開始直前、隣の第二コートから歓声が上がった。S中がO中に楽勝し、五勝一敗で全試合を終えたのだ。

I中は、此の試合を落とすと、二敗となり、市大会に出られない。しかも、相手は、今日まだ一度も試合をしていない、得体の知れない選手である。幾つものプレッシャーの中、其れでもI中選手は、自分達が負ける筈がないとの確信を持ってコート入りした。

既に、明美は、反対側のコートの中央で、ジャンプしてみたり、ラケットを八の字を描く様に振りまわしていた。

試合開始、I中選手の高く深いサーブスを、明美は何と後ろ向きになって追った。フットワークも何もない。そして、空振りした。I中選手は、基本も何も出来ない明美に対し、此れなら楽勝だと思った時、主審が、

「アウト、サーブチェンジ」

とコールしたのには驚いた。I中シングル三本柱と言われている中でも、サービスは、一番正確と評価されている自分が、ラインオーバーしたのだ。もしかしたら、相手は其れを読んだ上で空振りをしたのか……。

考えているうちに、明美のロングサーブスが飛んできた。正確にステップバックして、ハイクリアーで返したところ、明美が少し短めだった其のシャトルを、驚異的なジャンプカで跳び上がり、高速ドライブを打ち込んで来た。

ラケットで受ける余裕もなく、シャトルは顔面を直撃した。

其処からは、完全にまともな試合にならなかった。明美の無理な体勢からのスマッシュ、虚を衝いたドロップ、ヘアピンに翻弄され、また、お互いにコート中央で足を止めてのドライブの応酬では、完全に力負けして、明美のペースのまま、第一セットは終わった。

コートチェンジの際、K中側で応援していた四谷からハチマキを借りて、きりりとした明美は、今日初めての順番で、スタミナも充分、腕力、脚力、特にジャンプの高さが高く、其の高い打点からのスマッシュの速さは、とても女子中学生とは思えず、加えて、セオリー無視のトリッキーな動きからのフェイント技、I中三人目のシングル選手も、第二セットに入ってエンジン全開の明美の前に、為すすべも無く敗れ去った。

此の結果、一位K中、二位にK中戦の一敗だけで踏み止まったS中が入り、両校が市大会への切符を手にし、I中は三位にとどまった。

閉会式が始まり、一位K中、三位I中までに賞状が贈られ、K中では当然、キャプテンの智子が受け取った。

式が終わると、英雄は、選手達に、速やかに着替える様に指示し、自分は、此の大会の責任者でもあるI中の顧問に挨拶に行ったが、彼は、無言で頭を下げるだけであった。

既に会場出口には、智子を左端に整列していたので、英雄も其の横に並び、

「キャプテン！ 号令！」

「気を付け！ 礼！」

「ありがとうございました」

と全員で一礼して会場を後にした。

校門を出ると、智子が英雄に賞状を見せに来たので、

「俺より先に、由香に見せてやれ！」

「アツ、そうか」

少し後を歩いていた由香に、智子が賞状を見せると、あの冷静な由香が、智子に抱きついて、大声で泣き出したのだ。

其処へS中選手も、白井を先頭に走って追いついて来て、互いに、

「おめでとう、市大会も頑張ろうね」

と言いながら、両校入り混じって、誰彼無しに抱き合って嬉し泣きしていた。

「コラーツ、先生を置いて行くつもりか？」

明美が大声で、

「アツ、狸親爺が来た！」

「馬鹿野郎、明美、何て事を……」

と言いかけたところに、上原が息を切らせてやって来て、

「狸でも狐でも結構。とにかくおめでとう」

「ありがとうございます。こうなったら、市大会でも、一緒に大暴れしてやりましょう」

「若い人はいいな、私などは、もう疲れて駄目ですよ」

「もう、其の手は食いませんよ。しかし、S中選手の二試合目以降の立ち直りは見事でしたね。いったい、どんな手を使われたのですか？」

「何、簡単な事さ。会場の外へ連れ出して、

『K中に負けたのは俺の責任だ。此の通り謝る。だから、次の試合から大会が始まると思い直して、何時もの通り、白井を中心に残りを全勝するつもりで戦おう。K中の矢崎先生にも、援助する』と約束して来た。一緒に市大会目指して頑張ろう』
って言っただけだよ」

「はあ、また一つ勉強になりました」

其の横を明美が、

「ヒデさん、ちょっと失礼」

と駆け抜けて行った。

「コラーツ、ハチマキ返せ！」

と必死で追う四谷、

「ベーツ、やだよ。此処までおいで」
生徒はいいなあ」と、つくづく思う英雄であった。